

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：34416

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884082

研究課題名(和文) 地理的・歴史的変種の対照による日本語の敬語の運用とその変化に関する研究

研究課題名(英文) Changes in Japanese Honorifics: Comparison with Dialectal Variants

研究代表者

森 勇太 (Mori, Yuta)

関西大学・文学部・准教授

研究者番号：90709073

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、さまざまな地理的・歴史的な日本語のバリエーションにおける敬語の運用やその変化を対照し、敬語にはどのような変化が起こるのか、ということを一元的に理解することを目的とする。そのために、発話行為場面における敬語運用の変化を、授受表現や他の発話行為に関わる要素と対照させて研究した。本申請課題では命令表現として、[1-1] 広島方言における連用形命令の導入、および大阪方言との対照、[1-2] 否定疑問形の東西差の形成を明らかにし、申し出表現については、[2] 鹿児島県方言の申し出表現における「くれる」の運用について明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study, I investigated changes in honorific expressions in standard Japanese, and compared them to dialects. I dealt with the use of such expressions in speech acts where speakers are required to be polite. The results are as follows. Among dialectical expressions, ren-yo imperatives have recently come to be used in Hiroshima dialects, but there are no falling accent forms, and thus they form a different system to that in Osaka dialects. There is also a difference in the use of negative-question-imperatives, which emerged in the Meiji period and are used frequently in Kansai dialects but not in Tokyo dialects. Among offering expressions, "kureru" can be used in Kagoshima dialects when offering something to a superior, whereas in modern standard Japanese, it cannot be used when offering something. In other dialects, "kureru" can be used when offering something to inferiors but not to superiors.

研究分野：日本語学

キーワード：敬語 発話行為 命令表現 申し出表現 連用形命令 否定疑問形 くれる

### 1. 研究開始当初の背景

本申請課題は、さまざまな地理的・歴史的な日本語のバリエーションにおける敬語の運用やその変化を対照し、敬語にはどのような変化が起こるのか、ということを一元的に理解することを目的とする。敬語にはどのような変化が起こるのか、という問題は、辻村敏樹(1968)『敬語の史的研究』(東京堂出版)、宮地裕(1981)「敬語史論」(『講座日本語学 9 敬語史』, 明治書院)など多くの研究が追究してきたテーマである。その中で、「素材敬語の対者敬語化」(辻村 1968 等)の指摘など、多くの成果が蓄積されてきた。しかし、これまでの敬語研究は敬語のみを対象としており、近年では新たな事実の発見が難しくなっていた。一方で、近年、発話行為や授受表現など敬語に隣接した分野の研究が進展し、敬語研究を新たな枠組みの中で捉え直す環境が整ってきていた。

申請者はこれまで、日本語の敬語運用の歴史を研究してきたが、そこでは、聞き手に対する丁寧さが必要となる発話行為場面において、授受表現(「(～て)くれる」「(～て)くださる」「(～て)あげる」等)と敬語の用法を対照させるという手法を一貫して採ってきた。例えば、森勇太(2010)「行為指示表現の歴史的変遷 尊敬語と受益表現の相互関係の観点から」(『日本語の研究』6-2, 日本語学会)では、行為指示表現(依頼、命令等)を取り上げ、特に近代以降「(～て)ください」の機能が拡大したことを明らかにした。また、森勇太(2011)「申し出表現の歴史的変遷 謙譲語と受益表現の相互関係の観点から」(『日本語の研究』7-2, 日本語学会)では申し出表現を取り上げ、近世以前には上位者に対しても用いられていた「お茶を入れてあげましょう」などといった受益表現「(～て)あげる」を用いた表現が、近代以降用いられなくなっていることを明らかにしている。

これらの行為指示表現と申し出表現の考察からは、近世以前は授受表現の運用の制約よりも敬語の運用の制約のほうが強く働くが、近代以降は敬語の運用の制約よりも授受表現の運用の制約のほうが強く働くという歴史的变化があると結論づけていた。

### 2. 研究の目的

本研究でも、引き続き発話行為場面における敬語運用の変化を、授受表現や他の発話行為(命令表現、申し出表現)に関わる要素と対照させることにより研究することを目的とする。今回の研究期間では、特に敬語体系が変化することで授受表現や他の発話行為に関わる表現やその表現との相互関係がどのように変化するのか、また、それらの変化に時代差・地域差が見られるのか、という点を明らかにしたいと考えた。具体的には以下の点を研究課題とした。

#### [1] 命令表現

方言：西日本方言における連用形命令の導入

歴史：否定疑問形の東西差の形成

#### [2] 申し出表現

方言：「くれる」の上位者への授与を表す運用の成立

[1]命令表現のうち、方言の分野に関しては、西日本に見られる「行き」「食べ」等の連用形による命令形(以下「連用形命令」)が西日本の各地にどのように導入されているか、という点を研究課題とした。これは、森勇太(2013)「近世上方における連用形命令の成立」(『日本語の研究』9-3, 日本語学会)にて歴史資料を検討した結果、連用形命令の成立は敬語と関連があるのではないかと考えていたからである。歴史的に起こった経路がそのまま他方言でも起こるということは無条件に認められるものではないが、他の方言での言語的環境を確認し、歴史的な経路との関連を考察しておく必要があった。

の歴史研究としては「行カンカイ」「食ベンカイ」などの否定疑問形による命令表現を研究課題とした。否定疑問形による命令表現は、中世後期以降に見られるようになる形式だが、現在では西日本方言ではよく用いられるのに対し、東日本方言ではそれほど用いられないとされている。このような東西差がどのように形成されているかを明らかにすることは敬語や授受表現の変化に応じて、命令表現のあり方がどのように変わるか、そしてその変化のあり方には東西差があるのか、という点を明らかにすることにつながる。

[2]「くれる」の運用については、上位者への申し出を行う際に「持ッテイッテクレマシヨ」のように「くれる」を用いることができるか、という点を調査した。この用法は現代標準語では認められるものではないが、『方言文法全国地図』で鹿児島県方言に上位者の申し出で「くれる」を用いる地域があることを確認していた。そのため、どのような言語的環境でそのような運用が許容されるのか、明らかにしておく必要があった。

### 3. 研究の方法

敬語や授受表現等の表現の変化を対照させる、という目的のためには、日本語のさまざまなバリエーションを同じ枠組みの中で記述・対照させることが必要不可欠である。そのため、歴史研究・方言研究を組み合わせ、相互の関連性を探ることとした。それぞれのテーマごとに用いた方法を記しておく、以下の通りである。

#### [1] 命令表現

方言：西日本方言における連用形命令の導入

現地調査：命令表現の調査を広島県方言で行った。『現代日本語方言大辞典』等では、女

性のほうが連用形命令を導入していることから、男女差にも留意し、男女それぞれ複数人に調査を行った。

歴史：否定疑問形の東西差の形成  
 用例調査：近世後期以降の話し言葉が反映していると考えられる洒落本・滑稽本・小説等のデータをもとに、否定疑問形がどのように運用されているか考察した。否定疑問形は現代の西日本で多く用いられ、東日本ではあまり多くないことから、東西差にも配慮して文献を精査した上、分析した。

[2] 申し出表現：「くれる」の運用  
 現地調査：申し出表現における「くれる」の運用と敬語体系の相関について、現地調査を鹿児島県薩摩地方（鹿児島県南さつま市、いちき串木野市、鹿児島県薩摩川内市）にて行った。

研究は以下の通り進めた。

年度	[1-1] 連用形命令	[1-2] 否定疑問形	[2] 申し出表現
13	文献調査		現地調査
14	現地調査	論文発表	現地調査

#### 4. 研究成果

##### [1] 命令表現

方言：連用形命令

西日本方言における連用形命令の導入の調査として、大阪方言と広島方言の対照を行った。

大阪方言の連用形命令は動詞のアクセント式によらず、基本的に無核の形で実現する。（以下、アクセントは[カッコ]で示す。カッコの内側が高く実現する。）

##### (1) 【大阪・連用形】

書く（カ[ク]）：[カキ, [カキヤ  
 置く（オ[ク]）：[オキ, [オキヤ  
 投げる（ナゲ[ル]）：ナ[ゲ, ナゲ[ヤ  
 開ける（[アケル]）：[アケ, [アケヤ

ただし、低接の助詞ヤに接続することもあり、そのときには長音を伴って下がる。

##### (2) 【大阪・連用形 + 低接ヤ】

書く（カ[ク]）：[カキーヤ  
 置く（オ[ク]）：[オキーヤ  
 投げる（ナゲ[ル]）：ナ[ゲーヤ  
 開ける（[アケル]）：[アケーヤ

一方、広島方言では、無核の連用形命令は存在しなかった。

##### (3) 【広島・連用形】

書く（カ[ク]）：\*[カキ, \*[カキヤ  
 置く（オ[ク]）：\*[オキ, \*[オキヤ  
 投げる（ナ[ゲル]）：\*ナ[ゲ, \*ナゲ[ヤ

開ける（ア[ケル]）：\*[アケ, \*[アケヤ

ただし、低接の助詞ヤに接続することもあり、そのときには長音を伴って下がる。

##### (4) 【広島・連用形 + 低接ヤ】

書く（カ[ク]）：[カキーヤ  
 置く（オ[ク]）：[オキーヤ  
 投げる（ナゲ[ル]）：ナ[ゲーヤ  
 開ける（[アケル]）：[アケーヤ

しかし、広島方言では、命令形には長音形が用いられる。そのため、五段動詞では命令形命令と連用形命令は形態的に区別しうるが、一段動詞の連用形命令 + ヤと命令形命令 + ヤは区別がない。

##### (5) 【広島・命令形】

書く（カ[ク]）：[カケ]（ー）ヤ  
 置く（オ[ク]）：[オケ]（ー）ヤ  
 投げる（ナゲ[ル]）：ナ[ゲ]ーヤ（= (4)）  
 開ける（[アケル]）：[アケ]ーヤ（= (4)）

広島方言での取り入れ方は、もともとすべての動詞で下降する命令形命令の体系の中で、新しく連用形命令を導入しても下降の形式でしか受け入れなかったものと考えられる。

一方、大阪方言では、命令形式で平板と下降のアクセントの対立を許容し、このために連用形命令がすべての活用で確認される。つまり、現在のような命令形式の体系が成立する上では、平板と下降のアクセントの区別があったことが重要だったと考えられる。

連用形命令がすべての活用で命令形命令から区別されうるという点は、大阪方言の命令表現のアクセント形成が関わっていることが明らかとなった。

##### 歴史：否定疑問形

西日本方言では、命令表現として「はよ行カンカイ」という否定疑問形を用いることがある。この形式は、非常に厳しい命令表現として機能しているが、『方言文法全国地図』212-214 図によると、西日本では広い地域で否定疑問形が用いられているのに対し、東日本ではほとんど用いられておらず、地域差がある。この地域差は西日本では待遇表現が豊かなのに対し、東日本では西日本に比して単純であるという東西差と対応する。

この否定疑問形について東西の資料でその運用を調査した。関西方言では否定疑問形が近世から現代まで一定程度用いられている。一方、東京方言では、江戸期には用例が見られるものの、おおよそ大正期以降否定疑問形がほとんど用いられない。

(6) [藤兵衛 しづ]「サア所もぬかせ。こん夜立引にゆく。ワイコリヤぬかさぬか。」（上方：洒落本、十界和尚話）

- (7)〔北八 馬士〕「サアはやくやらねへか。」【さあ、はやく馬を出さないか】(江戸：東海道中膝栗毛)

このことは、近世後期江戸方言の否定疑問形は近世スタンダード(近世標準語)の一要素として用いられていたものが文献上に反映したものと考えられる。否定疑問形の東西分布が近代に入ってから形成されたものとは考えにくく、また上方語由来の否定辞「ぬ」を用いた否定疑問形の用例が半数程度あることから、文献に見られる否定疑問形は江戸の市井のことばに由来するものではなく、近代以降もその使用は定着しなかったと結論づけた。

## [2] 申し出表現

方言では「私が孫に本をくれる」のように「くれる」で目下の人物に対しての授与を表すことができる地域がある。ただし、多くの方言では、目下の人物に対する授与に限られ、目上の人物に対する授与で「くれる」は用いられない。また、歴史的にも「くれる」は目下への授与に限って用いられている。ところが『方言文法全国地図』を見ると、配慮を要する目上の人物に対する授与を表す申し出場面でも「くれる」が用いられている地域があり、鹿児島県や東北地方で「これをクレモンデ(鹿児島県)/クレルヨ(青森県)」のように用いられている。

それらの地域の敬語体系を調査したところ、「方言敬語を持たない」、「方言の丁寧語を持つ」という2つのパターンがあることがわかった。

また、「くれる」の上位者に対する授与・授益を表す用法を鹿児島県薩摩地方と甕島諸方言で調査したところ、薩摩川内市(本土)方言、いちき串木野市方言、甕島里・平良方言では上位者への授与・授益で「くれる」を用いないのに対し、甕島長浜・手打方言では同じ場面で安定して「くれる」を用いていた。

このことは、甕島長浜・手打方言にて、「くれる」の用法が拡張した結果、上位者に対する授与・授益も「くれる」で表せるようになるという意味変化が起こったからと考えられる。甕島長浜・手打方言では、聞き手に対して尊敬語接辞がほとんど用いられないため、それに伴って「くれる」の上位者から下位者への授与という意味が失われ、上位者への授与・授益を示すことが容認されるようになった。

日本語史において「くれる」は“上位者から下位者への授与”を表す語彙であった。下位者から上位者への授与・授益に用いられることはなく、むしろ「くれる」は話し手への授与を専用で表すようになり、用法が限定されてくる。中央語の変化は待遇的に保守的な方向、つまり、待遇的な違反を犯さないような方向に変化してきたと結論づけた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

森 勇太「条件表現を由来とする勧め表現の歴史 江戸・東京と上方・関西の対照から」、『近代語研究』,査読有,18,2015, pp.45-64

森 勇太「行為指示表現としての否定疑問形の歴史 上方・関西と江戸・東京の対照から」、『日本語文法史研究』,査読有,2,2014, pp.153-172,

〔学会発表〕(計 4件)

森 勇太「近世上方における連用形命令の成立」再考」東北大学国語史研究会,2014年8月11日,東北大学(宮城県仙台市)

森 勇太「やりもらい表現から見た日本語史」広島大学国語文化教育学講座「国語教育カフェ夏」,2014年6月28日,広島大学(広島県東広島市)(招待講演)

森 勇太「行為指示表現における疑問文の運用の歴史」国立国語研究所「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究発表会,2013年12月8日,大阪大学(大阪府豊中市)

森 勇太「条件表現を由来とする勧め表現の歴史 江戸・東京と上方・関西の対照から」2013年度第2回近代語学会,2013年12月7日,白百合女子大学(東京都調布市)

〔図書〕(計 1件)

森 勇太「申し出表現の歴史の変遷 授与表現の運用史として」『歴史語用論の世界』,査読有,2014,総ページ数299頁(担当 pp.247-269),ひつじ書房

〔その他〕

ホームページ等  
なし

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

森 勇太 (Mori, Yuta)

関西大学・文学部・准教授

研究者番号：90709073

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし